

はしがき

認知症高齢者を介護する人々への支援のあり方が、本書のテーマである。介護者には、家族介護者とサービス従事者の両方が含まれる。アメリカにおける研究と実践を検討し、現在の日本への示唆を考察する。

本書においては、介護者支援のなかでも、とくに心理・教育的な支援に注目する。それは、介護者が自分で介護の悩みを解決し、肯定的感情とともに生活を送ることができるための“後押し”をする支援だからである。

本書は研究書という性格をもつが、現場で介護者支援に関わる方々にも役に立ちうる内容を含んでいる。また、現に介護を行っている家族介護者やサービス従事者の方々にも、少しでも参考になればと思う。

高齢者ケアや認知症ケアは学際的な研究の場でもある。看護学、医学、心理学、ソーシャルワーク、社会学などの学問領域が関わっている。本書で重視する行動分析や活動理論は、どの領域でも活用しうるものである。学際的な研究と実践の進展に筆者もほんの少しでも関わることができたら、という希望をもっている。

2002年7月から1年間、セントルイス・ワシントン大学で研究の機会を得た。英語が得意とはいえない筆者だが、多くの先生方のご厚意のおかげで刺激に富む海外研修となった。自分の目で見、肌で感じ、耳で聴くことは、やはり大切なことだと思う。その経験は、文献を読んで理解したり考えたりすることにも役立った。

海外研修の期間に、ミズーリ大学のステッフエン教授を訪ねた。ご自身の研究を丁寧に説明してくださり、電話コーチが使う部屋なども見学することができた。同じ頃、アルツハイマー協会セントルイス支部を訪問した。専任スタッフの方からお話をうかがい、活気のある事務所の中を案内していただいた。

2002年秋のアメリカ老年学会（GSA）では、テリ教授のABCモデルの研修

を受けた。その後も何度かGSAに参加し、よい勉強になった。テリ教授のロートン賞受賞講演でステッフエン教授にお目にかかれたこと、バージオ教授によるアラバマ・リーチのワークショップ、ログズドン教授のポスター報告で直接お会いできたことなど、生の声を聞き、経験できたことが本書の土台となっている。

1年間の海外研修と本書の出版に際しては、鹿児島国際大学からの助成を受けた。また、福祉社会学部の同僚の先生方の励ましを、いつもありがたく感じている。法律文化社の田藤純子氏は、優しく適切なアドバイスで本書の準備を後押ししてくださった。

感謝すべき方々はあまりにも多い。思うように成果をあげることができず、また、失礼をしてばかりで、いつも申し訳なく感じている。本書では精一杯に背伸びをして研究視点の提起や実践的提言を試みたが、不十分な点も多いと思う。反省点を今後を活かし、少しでも頑張っけてゆきたい。

2011年7月

中山 慎吾